Monthly Contents（月刊誌の主な特集記事）

ザ・クインテッセンス／2013．3月号

○日常臨床に役立つQ&A　“華麗と味覚”の真実　第3回口蓋感覚と義歯について

（川上滋央／兒玉直紀／皆木省吾／松尾龍二）

＊日常臨床で上顎のパーシャルデンチャーを設計する場合、パラタルバーの位置や幅で苦慮することがよくある。違和感がないように設定したつもりでもなかなか満足が得られないことを誰しもが経験しているだろう。筆者らは口蓋の感覚点の存在などから、違和感の少ないパラタルバーの設定位置の決め方を、幅・厚み・走行位置を図解で具体的に示唆している。また、パラタルバーの設定位置をどのような方法で確認すればよいかの判定方法も解説している。これらはとてもわかりやすく、すぐに取り入れることのできる内容である。

日本歯科評論／2013．2月号

○<特集>患者さんは医院の外にいる――“待つ”医療から外に“出る”医療へ

（太田秀樹　他）

＊訪問診療はされていますか？これからは超高齢化社会になり、歯科医院に通えない患者さんは確実に増えてきます。それに伴い訪問歯科診療のニーズも高まってきます。本特集は訪問診療の場で歯科は何を求められているか、院内治療と訪問歯科診療をどう両立するかなどについてまとめています。是非一読して訪問診療を始めましょう。

○IPS e.max臨床応用のポイント――チェアサイドとラボサイドの視点から

（武内清隆　薄井秀敏）

＊最近のオールセラミック修復の発展は目を見張るものがあり、どんどん新材料が開発されています。なかでもIPS e.maxの注目は高まっていて、美しさ、強度など以前のものと比べ非常に優れています。このIPS e.maxの特徴、生かすための支台歯形成、接着操作の注意点などまとめています。既に使われている先生、これから使いたいと思っている先生には必見です。

デンタルダイヤモンド／2013．3月号

○実践歯学ライブラリー　超高齢社会における補綴歯科治療の新たな選択肢

―床義歯臨床におけるインプラントの使い方（馬場一美　他）

＊インプラントが急速に普及してはいるが、高齢者にとって、侵襲の高さ、高価なことなどから、パーシャルデンチャー、総義歯を選択することが、圧倒的に多い。本稿では、可撤性義歯では対応が難しい顎堤の吸収の著しい症例やすれ違い咬合の症例などに対し、床義歯として欠損部顎堤や残存支台歯を最大限利用しつつ、最小本数のインプラントを支台歯に組み込み、義歯の動きを制御するインプラントオーバーデンチャーとインプラントアシストパーシャルデンチャーの症例を紹介し、それぞれの種類や利点、今後の課題を述べている。

○次の一手　コンポジットレジン修復の適材・適処③臼歯部修復における形態付与のポイント

（青島徹児）

＊MI概念の浸透や接着技術の進歩により、現代のう蝕治療においては、維持、保持、抵抗形態を付与せず、感染歯質のみを除去し、接着処理を行って、CR充填をおこなうのが、第一選択となっている。本稿では、窩洞形成時の注意点として、①感染歯質のみの除去②機能、審美に影響がある部位の温存③コンタクトポイントの温存をあげ、充填時には、天然歯の形態を模倣することが、咬合や機能を回復する上で、理に適っていると述べている。

歯界展望／2013．2月号

○特集　トラブルを起こさない局所麻酔（深山治久　澤田則宏　伊藤幹太）

＊日常の診療で、当たり前のようになされている局所麻酔、一年間でカートリッジにして約6,000万本使用されているそうだ。歯科麻酔時にどのような工夫をすればトラブルに陥らないかが、重要になると思われる。今月、来月の二ヶ月に渡って特集される予定で、今月は歯内療法時と歯周治療時の局所麻酔のトラブルとその原因、注意点等について解説している。

○シリーズ　天然歯を守る再発する炎症、揺れ動く患者、そのなかで「天然歯」を守る21年

（丸森英史）

＊48歳男性で1991年6月初診の患者を、定期的な来院時の歯科衛生士のかかわりで、21年間歯を守っている。保存できるかどうか迷った時に症例報告を見ることも参考になるかもしれない。